

と く
徳

ほ う
朋

「ありのまま」と「あるがまま」

かい ほうりゅう
海 法龍



かい ほうりゅう

1957—現在

熊本県出身。真宗大谷派首都圏教化推進本部委員。真宗大谷派長願寺住職。

「あるがまま」と似たような言葉に「ありのまま」という言葉があります。少し前にアニメ映画の主題歌で有名になりましたが、「私は私」という「ありのまま」の使い方は、「私が思う私が私」、「私の気持ちに合った私が私」、「私の考えているような私になれるような私」、それが「ありのまま」ということでしょう。

しかし「あるがまま」は違います。「あるがまま」は私が考える前に、それを超えて私は私として、存在の事実としてあるということでしょう。「老いた私が私」、「病気になった私が私」。「いつか死んでいく私が私」。「うまくいくこともあるし、うまくいかないこともある私が私」。「人が好きだとか嫌いだとか思ってしまう私が私」。「あるがまま」です。

そしてその私は、誰にも代わることのできない私を生きているのです。私が二人いるのではない。私は一人しかいない。唯一なる存在です。ここに生まれてここを生きている。これから私と同じ人間が、同じように生まれてくるかという生まれこないのです。私はかけがえのない存在。人類史上始まって以来の私なのです。歴史的な存在です。それほど尊さと重さがある私なのです。それが「あるがまま」、「如」という言葉で表現されているのです。

しかし、その「あるがまま」を私たちは、なかなかいただけないのです。だからこそ、仏教

があるのです。みんなわかっていれば、仏教は生まれていないのです。わかっていれば、私たちに「あるがままですよ」と言う必要もないのです。どういうことかということ、私たち一人ひとりが「あるがまま」で、一人ひとりが尊くて一人ひとりに存在の重さがあると、私たちはわかっているようで本当はわかっていない。だからいのちそのものを知らなくてはならない、感覚していかなければならないのです。そういうことが願われているのです。

このことを分かっていない事を「無知」と言います。また見えていないということでもありますから「不見」とも言います。わかっていないから、見えていないからこそ、教えがあるのです。その教えの願いを親鸞聖人も含めて先輩方はお聞きになり、「ああ、そうだな、あるがままだな」といただいてこられたのです。(中略)

しかし、「一人ひとりかけがえのない存在」と言葉では分かっている、本当にそのことをいただくことは、私たちの日常生活ではとても難しいものがあります。私たちはそのことがなかなかわからないのです。いのちの感覚を失うようなものが私たちの中にあるのです。



『報恩の生活』

「あるがまま」とは頭では知っていても実感がわからないのが私達です。人生が「山あり谷あり」なのは、「あるがまま」に本当に気付いていく為の大切なご縁として与えられているからだと思えます。逆境にもまた光があります。(哲弘 拝)



この「徳用」は仏教を抛り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、頭で分からなくても構わないので気にせず読んでみて下さい。